

ドイツ文学と『若きヴェルテルの悩み』

斎藤 芙美子

1.

わが国では明治時代からいくたの文豪が外国文学の紹介に努められた伝統のおかげで、今日ではほとんどの外国文学が翻訳で読めるという恩恵に浴しております。しかしドイツ文学を愛読している人ということになれば、かなり数は限られているのではないのでしょうか。またドイツ文学といってもトーマス・マンなどがもっともよく読まれている作家であろうと思われる。こういう事情はアメリカあたりでも同じでして、ドイツ文学といえば、大抵の人はマンを話題にします。もっともアメリカはナチスにおわれたマンを迎え入れたという特殊な関係があるといえますが。あまり面白味がなくて、何となく野暮ったく親しみにくいというのが、ドイツ文学に対して抱かれている一般的イメージだろうと思いますが、無理からぬことでして、そうなりましたのもドイツの歴史的事情とその国民性に原因があらうと思われる。

ヨーロッパの文学史上もっとも古い作品と考えられる『イリアス』と『オデュッセイア』が完成したのが、ギリシャ都市国家の成立した紀元前9世紀から7世紀にかけてであるといわれておりますが、この頃ドイツでは鉄器の使用が始ったばかりで、考古学上のいわゆる鉄器時代にやっと入ったという状態です。ドイツ人の元祖であるゲルマン人が北ドイツ地方で活動を開始し、先住民族のケルト人と対抗するようになったのが紀元前3世紀ごろで、この先住民を徐々に征服し、ローマ帝国と直接境を接するようになったのが紀元前1世紀のころであります。地中海沿岸では絢爛たるギリシャ文化をうけついでローマが大帝国を完成して、ライン河やドナウ河流域に住む野蛮人を「ゲルマーニー」（東方の剽悍な隣人）と呼んで種々の記録を残すようになったのもこの頃からであります。

なかでもドイツの民族性を考える上にたいへん興味ある史料はタキトゥスの『ゲルマーニア』であります。「彼らは裸体で、無雑作な生活を営みながら、しかも我々の感嘆するあの肢体、あの体軀に成人してゆく。一々その母が自分の乳房で育てて、決して婢や乳母にまかせない。主人と奴隷とをみわけることができるような育て方の柔弱さは少しもない。」「かしこにあっては、結婚はまことに厳粛であって、彼らの風習の如何なる部分といえども、これに優って称讃せらるべきものはあるまい。何となれば、蛮族中、一婦をもつて甘んじているものは、殆ど彼らのみであり、」「婦人らは、〔ローマなどにおけるごとく〕、見世物の誘惑や、宴席の刺戟に損われることなく、よく貞潔を守って、一生をすぞす。文通の秘密は、男女とも同

ドイツ文学と『若きヴェルテルの悩み』

様に、全くこれを知らない。」「これらの国では、ただ処女ばかりが結婚し、新婚の望みとその誓いとは、ただ一度かぎりですまうのである。彼女らはあたかもただ一つの体、ただ一つの生のごとくに、ただ一人の夫をうける。」「彼らは女には神聖にして、予言的なる或るものが内在していると考え、而してそれゆえに、女の言を斥け、或はその答を軽んずることをしない。」（田中秀央・泉井久之助訳・岩波文庫）

ここに引用した箇所からでも、ギリシャ・ローマとは異質の民族性をそなえたゲルマン人の姿が浮び上ってまいります。特にこのゲルマンの女性像は、ドイツ文学の女性観の母胎となっているもので、ゲーテが『ファウスト』の終幕で、ファウストの魂を導くグレートヘンの姿を「永遠なる女性はわれらを引きて昇らしむ」（相良守峯訳・岩波文庫）と讃歌している言葉は、まさにこの女性観の神髄であるといわれています。

このようにギリシャ・ローマの世界とは全く異質の、原始的なエネルギーにあふれていたゲルマン民族が、ローマ帝国の弱体化にともなって、4世紀末からその領土内へ、いわゆる民族大移動を開始しました。この民族大移動は、歴史的には西暦800年に、ゲルマンのフランク国のカール王が西ローマ帝国皇帝に即位した時点をもって終止符がうたれております。カール大帝がローマで法王レオ3世によって戴冠を許されたということは、ゲルマン民族がギリシャ・ローマという古典古代の文化遺産をうけつぎ、また313年以来ローマ国教と認められてきたキリスト教を、異教徒であったゲルマン民族も受け入れて、いわゆる中世ヨーロッパが誕生したことを意味しております。このことは文化的にはまことに象徴的な事件でありまして、ヨーロッパ文明といわれるものの骨格、すなわち古典古代の文化とキリスト教とゲルマンの民族性の3要素の結合が、ここにできあがったといわれています。

カール大帝がゲルマン民族の大部分を包摂して、ヨーロッパ統一を果たしたことによって、ゲルマン民族がヨーロッパ文明の正面に登場することになりました。このことはかえって彼らに民族意識を覚醒させる結果になり、教会や官庁というラテン語圏に対して、「民衆的な」とか「自国の」という意味の *diutisk* (*deutsch*) という意味の言葉が用いられるようになり、そういう「民衆的な・自国の」言葉をラテン語と区別して考えるようになったのがこの頃であるといわれております。従ってドイツ語で書かれた文献もこの頃から残されだします。もっともこの時代の読み書きできる人というのは主として僧侶であり、彼らはラテン語圏で生活していたので、ドイツ語の文献として残されたものが非常に少いのは当然のことですが、それでも少数の僧侶たちによって福音書などがドイツ語に訳されました。

しかし文学として扱える文献ということになりますと、文学の母胎は、いづれの国でも民間に伝承された口誦文学の中に見出されるのでして、ドイツ文学の場合でも、カール大帝が即位するまでに、民族大移動期に活躍したゲルマンの英雄たちの伝説が、ほぼ完成していたと考えられます。しかもカール大帝はキリスト教的なヨーロッパ統一を遂行する一方で、ゲルマン民族の遺産たる異教的な英雄伝説を集録させたといわれております。しかしその後、中世のキリ

スト教的色彩がますます濃くなるに従って、ゲルマンの異教的な英雄物語はキリスト教を布教する上で障害になるとして焼き払われました。

それ故この時代の文学的な文献はほとんど残されていないのですが、たまたま祈禱書の表紙の裏に書きとめられていたので、露見せずに残っていたといわれる『ヒルデブラントの歌』がわずかに英雄伝説の断片を伝えているにすぎません。従ってドイツ文学史においてゲルマン民族の遺産たる英雄伝説をうかがい知ることができるのは、1200年前後にまとめられたと推定される『ニーベルンゲンの歌』によってであります。この12・3世紀ごろは、後のゲーテ・シラーが活躍する18世紀と並んで、ドイツ文学史上もっとも隆盛をきわめた2つのピークであるといわれております。

カール大帝によってヨーロッパ大統一がなされたのですが、その没後9世紀の半ばに西ローマ帝国が崩壊し、後のドイツ・フランス・イタリアの3国に分割されます。いろいろの抗争をへて、962年オットー大帝が神聖ローマ帝国皇帝として即位して以来、ドイツ民族が中世ヨーロッパの中核としての地位を築きあげました。その最も繁栄をほこった時代が12・3世紀のホーエンシュタウフェン王朝治下であったわけです。この時代にドイツ文学も最初の開花期を迎えたのであります。

11世紀以来十字軍の遠征がはなばなしく行われるようになり、騎士階級は時代の花形となりました。かつて僧侶の手に握られていた文化は、今や騎士階級とその仕える官廷が掌握することになりました。カール大帝の時代にラテン語圏に対してゲルマン民族の中に始めて *diutisk* という意識が覚醒したのでありますが、この十字軍の遠征が行われるようになって、アラビア文化圏やビザンティン文化圏との接触があったり、神聖ローマ帝国に属さない国々からの十字軍との交流などが行われるようになった結果、他国との区別意識が *diutschland* (*Deutschland*) という言葉を生み出すことになりました。

こういう時期に、ゲルマン民族大移動期の英雄伝説があらためてまとめられ、『ニーベルンゲンの歌』ができ上がったということは、神話とナショナリズムの関連を想起させ興味深い気がいたします。『ニーベルンゲンの歌』の制作者は不明であります。恐らく宮廷に仕えていた騎士詩人であろうといわれています。キリスト教的な騎士時代にまとめられたので、時代の影響が皆無だとは申せませんが、この物語の本質はあくまでも異教的なゲルマン的性格にあるといわれております。一口でいえば、これは夫ジークフリートを奸計によって殺された妻クリームヒルトの復讐の物語であります。登場する人物はいづれ劣らぬ巨人的な英雄ばかりであります。血縁であるとか主従であるとかいう運命的な力によって苦境に立たされ、英雄が英雄を倒せば、またその英雄が他の英雄に討たれるという凄惨な場面を重ねながら、復讐への強烈な意志がつらぬかれ、最後は畳々たる屍のみが残されてこの悲劇は終わっています。ここに、この作品がゲルマン的英雄主義、ゲルマン的運命観、ゲルマン的徹底性、そのディオニュソスの性格をもっとも色濃く保っていると評される所以があります。

ドイツ文学と『若きヴェルテルの悩み』

このような「民族叙事詩」といわれる英雄物語が再編された12・3世紀は、また「騎士文学」の最も見事な抒情詩・叙事詩が輩出した時代でありました。この時代の文化の主役はゲルマン的民族性をキリスト教によって教化された騎士階級であって、神を崇拜し、婦人を敬い、主君には忠誠をつくし、礼節を重んじ、正義と奉仕をモットーとする騎士道精神を確立いたします。従って騎士文学のテーマも、要するに騎士がいかに修業をつんで騎士道精神を確得するかということでありまして、そのための重要な契機として婦人に対するミンネといわれる愛が取り扱われます。『トリスタン』とか『パルチファル』等は騎士文学の代表作といわれるもので、特に後者は、主人公パルチファルの人間としての内面的形成過程をえがいたものとして、ドイツ教養小説（その典型はゲーテの『ヴィルヘルム・マイスター』です）の始祖として文学史上高く評価されているものであります。

しかしこの隆盛を誇った騎士文化もホーエンシュタウフェン王朝の没落と共に、13世紀後半になると凋落の一路をたどります。換言すれば、これはオットー大帝が神聖ローマ帝国の皇帝となって以来、中世ヨーロッパの中心的地位を占めていたドイツの凋落でありました。この中世末期になりますと、都市の発達にともない市民階級が抬頭してまいります。他のヨーロッパ諸国では、この市民階級が中央集権的な王権と手をにぎって近代国家への体制を整えていくことになるのですが、ドイツではホーエンシュタウフェン王朝没後の大空位時代（1254～73）が象徴するように、その後中央集権を達成する王権が出現せずに、小国家に分立していきます。そして市民階級もこの小分立国家の枠内に閉じこめられ、狭小な分立的精神におおわれ、イギリス・フランス・イタリアなどの市民階級のように、近代の扉を開く積極的な存在にはなりません。これ以後ドイツは他のヨーロッパ諸国に政治的にも文化的にも大きな遅れをとることとなります。

2.

14世紀初頭にイタリアで始まるルネッサンスの運動によって近代精神が目覚め、イタリアではダンテ・ペトルカ・ボッカチオが、イギリスではチョーサー・シェクスピアが、フランスではラブレール・モンテーニュなどが近代文学の夜明を告げることとなります。しかし市民階級の立ち遅れたドイツでは、このルネッサンスの波は人文主義者と呼ばれる一部の知識人階級にのみ受け入れられたのです。彼らはギリシャ・ローマの古典に帰り、ラテン世界に没入してしまっただけで、一般の市民階級にまで影響を及ぼすには至りませんでした。ルネッサンスの個の自覚と尊重という近代精神は新しい市民階級こそが体現できる精神であって、ドイツのように市民階級がルネッサンスを受けとめなかったところでは、他のヨーロッパ諸国のように近代文

学の夜明は告げられずに、低迷しつづけるのでした。

しかし文芸の復興はなしえなかったドイツではありますが、近代精神の芽ばえが16世紀初頭に宗教界に現われました。すなわちルターの宗教改革であります。中世の人たちにとっては神の恩寵を求めるために、仲介者としての教会は欠くべからざる存在でありました。それに対してルターは教会というような外的權威の媒介なしに、各個人が聖書の福音のみをよりどころとして、直接神と結びつく信仰の復権を主張したのであります。このような個の尊重はまさしく近代の発想でありました。

しかも、聖書こそ神の言葉であると考えたルターは、各人が直接ふれることができるように聖書を母国語に翻訳せざるをえなかったわけです。諸侯の分立国家のより集ったドイツは方言が主で、共通語は官庁用語以外はほとんどない状態でしたが、ルターは生地である中部ドイツのザクセン地方のマイセン方言が、南北両地方から理解される融通性をもっている点に着眼し、これに官庁用語を参考にしながら聖書のドイツ語訳を完成したのであります。ルターのドイツ語訳聖書は燎原の火のようにドイツ中にひろがり、始めて共通ドイツ文章語が確立したわけです。他のヨーロッパ諸国がルネッサンスの文豪によって、その近代的な母国語の整備が行われたのに対し、ドイツではルターによって近代ドイツ語の基礎がきずかれたのであります。

ルターの宗教改革の運動は、しかしまた旧教側からの猛然とした反撃をひきおこしました。これが16世紀から17世紀にかけての宗教戦争の時代であります。分立国家であったドイツでは、この宗教戦争が一大内乱にまで発展し、全土にわたって惨たんたる荒廃をひきおこしました。ドイツが衰頹のどん底に沈んだこの時代の前後に、イギリスとフランスがエリザベス女王とルイ14世の治下で、それぞれの文化の華々しい開花をみたのとは全く対照的でありまして、この時点でドイツの後進性は決定的となったのであります。

宗教戦争の終わった17世紀後半はまさにフランスの時代でありました。ルイ14世のもとでヨーロッパ第一の強国となったフランスでは、コルネーユ・ラシーヌ・モリエールがフランス古典主義文学を完成したのであります。シェークスピアのような偉大な文学遺産をもつイギリスですら、シェークスピアの自由を排して、フランス古典主義に倣い、アリストートルの詩学を重んじるようになりました。

一方ドイツも戦争の疲弊からようやく立ち直る兆があらわれますが、文化遺産が貧しく、後進的な社会体制にあったこの国へは、他のヨーロッパ諸国の文学が無差別に流入し模倣作品が氾濫します。しかも17世紀のドイツは、ルネッサンスや宗教改革によってひき起された現世中心主義や個の覚醒が、強大な反宗教改革の運動によって脅威にさらされ、虚無感や無常感、来世待望というような中世的な感情が復活してきた時代でありました。人々の精神状況もこの中世的なものと同代的なものに大きく分裂し、はげしい振幅をくり返したのであります。従って17世紀のドイツ文学は、この分裂した精神状況を反映して、現世肯定と現世否定、享楽欲と禁欲という二元的な感情が混在としている文学であるといわれております。こういう状況はま

ドイツ文学と『若きヴェルテルの悩み』

さにドイツ的な現象であるとして、今世紀に入ってから17世紀ドイツ文学をバロック文学と呼ぶようになりましたが、その評価ははまだ混沌としているようであります。

18世紀に入りますと、ようやくドイツでも近代の精神を体現すべき市民階級が成長してまいります。フランスがドイツに対する政治的ヘゲモニーをもっているという状態は、宗教戦争以来つづいていたわけですが、文化面でも諸侯の宮廷はこぞってフランス宮廷文化を模倣し、貴族はもとより、文化人といわれる人はラテン語でなければフランス語を用いるのが常でありました。こういうフランス一辺倒の姿勢を排して、新しい国民文化を形成するのが18世紀のドイツ市民階級であります。文学史上でも、12・3世紀の騎士文学につづく第2の黄金期をここに迎えることとなります。

この新しい国民文化を形成する契機となった文化運動が、17世紀末から18世紀にかけてドイツへ入ってきた啓蒙主義運動でありました。ルネッサンス以来の人間尊重のヒューマニズムを自然科学の発達に伴って生まれた合理主義によって基礎づけたところの啓蒙主義は、フランス革命の原動力となった思潮であるわけですが、この啓蒙主義がドイツへ入ってくると、プロシヤの「朕は国家第1の公僕なり」といったフリードリヒ大王に典型的にみられるように、本来市民階級が体現すべき思潮を、宮廷が先取りするという歪曲がおこりました。さらにドイツ特有の現象は、合理的な啓蒙主義が非合理的な敬虔主義と共存しえたということでもあります。

敬虔主義というのは、中世末期よりドイツに流れつづいてきた神秘思想を源泉としている一種の宗教的個人主義であります。個人の魂の自由を認め超宗派的な傾向をもつ敬虔主義には、近代的ヒューマニズムとの親近性がありましたので、ドイツ市民階級は敬虔主義的な心情を保持しながら、啓蒙主義を受け入れることができたのであります。だからこそカントはドイツ啓蒙主義の代表者であると共に、その超克者であるといわれるのであり、また啓蒙主義文学の代表者であるレッシングも市民的ヒューマニズムの背後に、宗教的敬虔さをもち合せている人であったのです。

啓蒙主義の本来の精神は、イギリス・フランスの民主主義思想の母胎となったものであります。それがドイツへ入ると啓蒙専制政治と呼ばれるような歪曲を示し、冷酷なまでに合理的に権力政治を追求するための手段とされてしまったので、そのような宮廷的合理主義に反発する風潮をかもし出し、それが反フランスという国民的感情によって助長され、ドイツ的な転換をなし遂げるわけです。

この転換を準備したのが、敬虔主義的な思想家であったハーマンと、彼から決定的な影響をうけたといわれるヘルダーでありました。カントと同時代人であるハーマンもやはり啓蒙主義の洗礼をうけたのでありますが、理性は自己に内在する論理的法則によって自立的に真理を認識することができるという、理性万能の啓蒙主義的思考方に納得できなくなり、人間は感覚と理性を同時にかね備えた存在であるから、真理も感覚や感受性を通して自然と歴史から具体的に把握しなければならないという観点に立つようになったといわれています。このハーマンの

ドイツ文学と『若きヴェルテルの悩み』

考え方に深く影響されたヘルダーは、理性的規範の軛のもとで窒息しかかっていた当時の文学界に個性的な感情の解放をふき込み、すべてのものを既成概念で規定することをやめ、その存在する場所で、その存在の内側から理解しようとする歴史的思考法を確立することによって、シュトルム・ウント・ドラングの理論的指導者になったのであります。

シュトルム・ウント・ドラングとは1770年から80年にかけてドイツで起った文学運動の名称であります。当時の文学青年たちは、啓蒙主義を宮廷的合理主義に歪曲し、ロココのフランス趣味を奉じて恥じない貴族文化に反抗して、ハーマン・ヘルダーに導かれて自我のもつあらゆる可能性を全面的に解放し、民族的な基盤に立った、生命力にあふれる新しい国民文学を指向したのであります。従って彼らの傾倒した詩人は、啓蒙主義時代にあっても熱烈な感情の文学を書いたクロプシュトックであり、イギリス国民性に立脚した生命力のあるシェークスピアでありました。またフランス絶対王制下において近代を先取し、「自然に帰れ」を唱えたルソーが彼らの水先案内をつとめたのであります。

3.

1770年ヘルダーは旅行の途上で、眼の治療のために約7カ月の間シュトラースブルクに逗留しました。当時21才のゲーテも、この地へ留学していたのですが、偶然にヘルダーと出会い、自ら名のり出たのであります。わずか5才年上であったにすぎませんが、すでに評論家として活躍していたヘルダーにとって、無名の青年ゲーテが名のり出たところで「彼にとっては何の意味ももち得なかった」（『詩と真実』小牧健夫訳・岩波文庫）のですが、天才の片鱗を予感したのでしょうか、ヘルダーはゲーテに快く再訪を許したのです。このヘルダーとゲーテの出会いは、ドイツ文学史上まことに重要な意義をもつことになりました。ゲーテはヘルダーによって「日に日にいな時々刻々に新しい見解へと押し進められずにはいなかった」（『詩と真実』）のです。この結果、ハーマン・ヘルダーによって準備された新しい国民文学のための理論が、ゲーテによってみごとに花ひらくことになったのであります。

ヘルダー体験によってゲーテの創作欲は大いに刺戟され、新しい作品が次々と生み出されました。就中ゲーテをシュトルム・ウント・ドラングの旗手にした作品は、戯曲『ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン』と書簡体小説『若きヴェルテルの悩み』であります。特に後者はその当時からヨーロッパ中で大反響を呼んだ作品であり、現代でもゲーテの作品中でもっともよく読まれているものです。12・3世紀以来ながく低迷をつづけてきたドイツ文学が、この『ヴェルテル』によって、ドイツ国民性に立脚した新しい文学の道を開くと共に、世界文学の流れの中に、その存在をしっかりと打ち立てたのであります。

よく指摘されることですが、この作品を書くまでに三つの事件がゲーテに起っています。

第1は、1772年に、弁護士となったばかりのゲーテが実習のため一夏ヴェツラールで滞在し、そこで婚約者のいるシャルロッテ・ブフに恋をしたことです。第2は、このヴェツラールで知り合いの間柄であったエルーザレムという青年が、上官の妻に恋をして、ゲーテがこの地を去った直後に自殺をしたということ、第3は、約2年後にゲーテが人妻であったマキシミアネ・ブレンターノに心を寄せたということ、このような事件が詩人の創作欲を刺戟し、1774年の春に初稿が短時日で完成したのであります。

「恐らくゲーテはこの『ヴェルテル』も、初期の作品が全てそうであるように、計画も立てずに、一気呵成に書きおろした」(エーミール・シュタイガー『ゲーテ』・1952年)と思われませんが、その構成と内容の完璧な一致は、まさに天才的創造力としか云いあらわしようがありません。

ゲーテはこの作品を書簡体形式で書いておりますが、『詩と真実』で告白しておりますように、「人と一緒になって時間をすくすくを何より好んでいた習慣から、作者は、独りでする思索をも、人との会話のように変えた……頭の中での会話が、どんなに手紙の往復に似ているかは、きわめて明白なことであるが、ただ後者の場合は、うち明けて話せばそれに返事があり、前の場合には返事はないが、新しい、次ぎ次ぎと変った打明け話を自分で創造して行くことができる。それだから、差し迫った不幸もない人間が、人生に感ずる、その倦怠の気持を描くべき場合になると、作者はすぐさま彼の気持を手紙で表わすことにならざるを得なかった」のであります。

しかもヴェルテルからの一方的な手紙にしたということは、シュタイガーも指摘しているように、「幅と多様性という点ではマイナスかもしれないが、精神的な緊張感という点ではプラスになっている」と思われます。ヴェルテルの立場からのみ推移が描写されていることによって、彼の心理の変化と囲りの変化とが相呼応しながら、起承転結ともよぶべきみごとな展開と緊張を生み出しています。

そこでこの作品を起承転結という四つの部分に分けて、構成と内容を考えてみたいと思います。まず〔起〕の部分。少々わずらわしい人間関係の縛からやっと解放されて、孤独を楽しむ青年特有の心理が春の自然を背景に浮び上がってきます。「ともあれ、私はここで元気だ。この天国のような地方にいて、孤独は私のところにとって貴い匂い油のようだ。」(竹山道雄訳・岩波文庫1771年5月4日付)「いま胸一杯に味っている甘美な春のあした、それとひとしい爽かさが、私の魂をのこる隈なく浸している。私はひとりで生きて、私のような心のためにつくられたこの土地に暮して、わが生を楽しんでいる。友よ、私は幸福だ。静穏な存在という感情の中にすっかり溺れてしまっている……やさしい谷が身を繞って煙っている。沖天の太陽はわが森にこめた闇の外にたゆたい、わずかに2すじ3すじの光線がその聖き奥へと洩れ入っている。そして私は流れおちる瀬のほとりの背の高い草の中に臥して、大地にちかくよりそいながら、さまざまの小さな草にむかって好奇の目を瞪る。ならぶ茎のあいだの小さな世界のうごめ

き。這う蟲や飛ぶ蟲の無数の姿。これらのものに心うたれながら、私はただちに感じる、おのれが姿に象ってわれらを創造したまいし全能なる者の現前するを。また、われらを永遠の歡喜のうちにただよわせ支え保つ、一切を愛する者の息吹きを。」（5・10）

自然のふところに抱かれて、生の歡喜にひたるヴェルテルの心にひびく子守歌は、明るい南欧の地に生まれたホーマーの歌でありました。「自然のみが無限に豊かで」「一切の規則というものは、誰が何といおうとも、自然の真の感情と真の表現を破壊してしまう」（5・26）と考えるヴェルテルは、自然にもっとも近い存在である村の子供たちのエピソードを、情愛をこめて書き送るのでした。

ヴェルテルの心を自然への感激で一杯にするヴァールハイム、ここの若い農夫のエピソードが〔承〕の部分への転換点となっています。このエピソードは、これからのヴェルテルの行途をたくみに象徴しているといえましょう。奉公先の未亡人に「ひたむきな愛着と恋と誠」を捧げている若い農夫の物語は「いままでに、かくも切ない欲情をもまた熱いあこがれをも、このような純粋な形で見たことがなかった……あの無垢と真実を思い出すごとに、私の魂の秘奥は燃えあがる。あの誠実と可憐の姿はいづくにいても私を追う」（5・30）とヴェルテルを感激させるのです。

この象徴的なエピソードを挿んで、次の手紙からロッテとの出会いが展開していきます。「世にも愛らしいこの娘を知るにいたった顛末を、順序だてて話すことはむづかしい。私は幸福でたのしい。だから、史実の記載はうまくできないね。天使！—やれ、やれ！ だれでも自分の恋する女のことをそういう。だろう？ それでも私は、彼女がいかに完全であるか、いかなれば完全であるか、を君にはいえない。あのひとが私のあらゆる感覚を捉えてしまったのだから。あれほど理智的でありながらしかも無邪気で、あれほどしっかりしていながらしかも優しく、あれほどいきいきと働きながらしかも魂の平安をたもっている」（6・16）という描写でロッテ像が読者の前に現われてきます。しかもヴェルテルが「可愛らしい元気な子供たち、8人の弟妹にかこまれて」パンを切り分けているロッテの姿を最初に見たということは、ロッテの自然性を巧みに象徴したものといえましょう。自然の人として描かれたロッテ像には、あきらかにゲーテのゲルマン的女性観がうかがわれます。

「あのひとは全心全霊をうちこんで踊っている。体がすべて一つのハーモニーをなしている。ものおもいなく、こだわりなく、これが総てであるかのように、ほかには何事も考えもせず感じもせず……あきらかに今のこの瞬間にあっては、ほかの一切はあのひとの前から消えさせた」（6・16）ロッテの自然の姿に「魂の底まで惹きつけ」られたヴェルテルの歡喜の瞬間を浮び上がらせるのは、初夏の夕べの「雷光」と「雷鳴」であります。

「雷鳴は天涯に去っていた。沛然たる雨が大地の上にざわめいていて、あたりにみなぎるあたたかい大気の中を、胸蘇るような爽やかな匂いがこちらの方へとたちのぼってきた。ロッテは

肘をついて窓にもたれ、眼ざしをじっとかなたの風景にそそいでいた。彼女は窓を仰ぎ、また私を見たが、眸には涙があふれているのが分った。彼女は自分の手を私の手の上にかさねて、いった。「あゝ、クロプシュトック！」—彼女の想念の中にかんだあの荘嚴な頌歌を、私はすぐ察した。彼女のこの合言葉はさまざまな感傷の潮を私の全身に浴せ、私はその中に溺れた。私は自分を抑えかねて、あのひとの手の上に身をかがめて、歓喜の涙もろとも口づけた」(6・16)。ヴェルテルはロッテの中に、自己と同じ心を、同じ感動を見出し歓喜に酔いしびれています。

ロッテを知り、「生の至純のよろこびを味わい」(6・21)ながらも、同時に「おお、遠ち方はさも未来に似ている！ 漠然たる大きな魂が、われらの魂の行手にうかんでいる。われらの眼とおなじくわれらの感覚はそのうちに溶け入り、われらは、ああ、われらの全存在を投げ出して、ただ一つのかがかしい感情の大歓喜もて充たされたいと願う。—それなのに、ああ！ われらがいそぎ赴いて、かしこにありしものがここにありるとき、すべてはつねに旧態依然である。われらは変らぬ貧窶と制約の中にあり、魂はついに捉ええなかった香膏を求めて、渴えあえぐ」というヴェルテルの感慨は、彼が「深い純粋な感受性と真の洞察力をそなえていた」(1774年6月1日付のシェーンボルンに宛てたゲーテの手紙)ことを示しております。ヴェルテルが「純粋な感受性」と同時に「真の洞察力」をかねそなえていたということは、彼の破局を理解する上に欠くべからざる要素かと思えます。彼の鋭い洞察力は「とおき昔の族長時代の生活のおもかげ」のあるヴァールハイムの田園生活の中にしか、「おだやかな、いつわりのない情感で心を見つめ」(6・21)生活は存在しえないことを見抜いているのです。

いつわりのない情感で生きていける自然の世界、このヴァールハイムで、ヴェルテルは泉の涼しい蔭に憩うことも忘れ(7・6)、夏の日々ロッテへの想いを燃え上らせます、「ああ、全身の血脈がおののく。ふとこの指があの一の指にふれるとき、この足が食卓の下であの一の足に出会うとき！ 思わず私は火から身をひくが、奇しき力がふたたび前へと牽く。五官はくるめく。—おお、しかもあの一の汚れなき、うちとけた心は、こうした小さな親しみがいかに私を苛むかを感じない。話しあいながらその手をこの手にかさね、興に熱しては身を近づけて、その口のきよい息吹が私の唇にふれさえる—。私は雷光にあたって気を失うのではないだろうか……。ロッテは私にとって神聖だ。その前にあっては、一切の欲念は沈黙する」と(7・16)。彼には「かってこれほど幸福だったことはないし、小さな石塊や草の葉にいたるまでの全自然に対する感受性が、これほど充溢して切実だった」(7・24)瞬間はありませんでした。

この時、婚約者アルベルトが帰ってきます。ヴェルテルは去ろうと決意しながらも、「精力を銷尽する病苦が、同時に勇気をも奪ってしまうので、この病人はわれとわが身を病苦から解放することができない」(8・8)ように、彼は立ち去りえぬまゝに、アルベルトと彼の対照的な相違をあきらかにしていきます。

たとえば、「自殺」(8・12)について、冷静で理性的なアルベルトは、自殺は弱さであるとい切るのに対して、「それを弱さだとおっしゃるのですか？ おねがいです、外見によって惑わされないようにしていただきたい。暴君の堪えがたき桎梏の下に呻吟する国民が、ついに蹶起してかれをつなぐ鉄鎖をたちきったとき、それが弱さといえますか……緊張が強さであるといわれながら、どうして極度の緊張がその反対でありうるのですか？」「人間の本性には限界があります。よろこびにも悩みにも苦しみにもある程度までは堪えられるが、その限界を起えると、たちまち破滅します。だから、今の場合の問題は、その人が弱いとか強いとかにあるのではない。その人が一精神的にでも肉体的にでも一苦しみの限度に耐えきれぬか否かにあるのです。だから、みずからの生を絶つ人を卑怯者だというのは、悪性の熱病によって命を奪われる人を卑怯者とよぶのと同様に、不当であり奇怪であると思います」とヴェルテルは反論しているのです。

アルベルトの登場は婚約者の登場という以上の意味があるようです。冷静で理性的な人間がヴェルテルの生の喜びそのものである自然の世界(ヴァールハイム)の中に立ち現われたということは、彼にとっては、まさに異物の混入であり、自然の妨害者であったらうと思われる。だからこそ彼の目の前から、アルベルトが登場する以然の、あの生の喜びの象徴であった自然は姿を消してしまうのです。

「人間に喜びをあたえるまさにそのものが、かえってその悲惨の因となるり」(8・18)、彼は喜びと苦しみの両極限に立つことによって、精力を鎖尽していきます。かつて「生きる自然に対する情感はわが胸にあふれて、私は多くの歓喜に浴みした。これによって四囲の世界はわがための天国と化した。それなのに、これがいま堪えがたい迫害者、呵責する霊となって、どこにいても私を迫りくるしめる」という言葉につづく8月18日の手紙の風景描写は、5月10日・12月12日の手紙の風景描写と共に、ジャン・パウルによって「あらゆる時代を通じて輝き、また鳴り響くであろう」(『美学入門』古見日嘉訳・白水社)と称讃された名文ではありますが、ヴェルテルが歓喜にみちて眺めた壮麗な自然は、今の彼の眼には「ただ永遠に啖いつくし永遠に反芻する、怪物にすぎなく」なっています。「活動力は調子がくるって、落ちつかない懶情となってしまう……自然にも無感覚となった」(8・22)ヴェルテルには、ヴァールハイムも「いつわりのない情感で心のみたす」ところではなくなったようであります。「生の至純のよろこび」を体験したかがやかしい夏が去った今、ようやく彼はこの地を去る決心ができたのでした。ここで第一巻は終わります。

第二巻はヴェルテルが新しい地で、新しい勤めについた知らせで始まります。〔転〕の部分に入ります。ここで彼をとりまく人々は、「わずかばかりの力量と才能をもって、いと快適に得得と彼の面前を闊歩する」(10・20)人や、「官僚主義」で「石橋主義」(12・24)の上官や、「全心全霊ただ儀礼にのみ汲々として、あけてもくれても食卓で一つでも上席にわりこむことばかり念じている」連中でありました。

だからこそ、吹雪を避難して借りた農家の一室に落ちついた時、彼は「おだやかな、いつものない情感で心を見ます」田園生活と「生の至純のよろこび」であったロッテへの想いに突然おそわれたのです。「はげしい吹雪を避けて、このささやかな農家に逃げこみましたが、愛するロッテよ、この一室にいて、あなたに手紙を書かずにはいられなくなりました。あのわびしい人間の巢Dの町で、自分の心にふれるものとは異なる他人のあいだに交っているときには、あなたにお便りをする気になれるような時はありませんでした。それなのに、今、この茅舎、この寂寥、この雪と霰が狂おしく窓に吹きつけている中にたれこめて、何よりも念裏に浮ぶのはあなたのことです。この部屋に足を踏み入れるやいなや、あなたの姿、あなたの想い出が、私に襲いかかってきました。おお、ロッテ！きよらかに、あたたかく！ ああ、あの最初の幸福な瞬間がふたたびよみがえってまいりました。」（1・20）

この同じ手紙の中で、彼の「生命を躍動させていた酵母のない」あのわびしい町で、唯一人彼の心情に共感できる女友達と「けがれない幸福にみちた田園の風景に想いふけて、幾時間もすごし」、ロッテのこと、子供たちのことを想うと書き送るヴェルテルは、彼の生きていける世界が、まさに田園の世界、すなわちいつわらぬ情感の持ち主であるロッテや、子供や、あの若い農夫らが住んでいる自然の世界のみであることを洞察しております。

それ故、フォン・C伯爵邸の夜会で、「われわれの階級の風習にはおどろくべきものがあったね、君がここにいるのが、どうもお客様方にはうれしくないらしいのだ」（3・15）といわれた時、彼はこのわびしい連中の町を去る決意をしたのでした。

次に彼が寄寓した公爵も「悟性」の人であって、彼は次のように告白せざるをえません。「公爵は私の知性と才能とを、私の心よりも高く評価している。しかし、この心こそは私が誇る唯一のものであり、力も、浄福も、悲惨も、すべてこの泉から湧く。ああ、私が知っていることは何人も知ることができる。一ただ私の心は私だけのものだ」（5・9）と。

どこにいても、彼は安住の地を、自然の世界を、心で生きていける世界を見出すことはできません。「げにも私は1人のさすらいびとだ。この地上の巡礼だ！」（6・16）という手紙が、雷光と雷鳴の中で、生の歓喜の瞬間を味わった日の丁度1年後に書かれているのは、何と対照的なことでしょうか。

巡礼となったヴェルテルは、もう一度ロッテのもとへ、1年前には彼の住みえる自然の世界であったヴァールハイムへと赴きます。〔結〕の部分が始まります。しかし彼の自然の世界は破壊されずにあの地にあるのでしょうか。否、彼自身くらい予感を決定的な言葉で表わしていません。「彼（アルベルト）はあのひとの心のねがいをすべて充たす人間ではない。ある感受性の欠如。欠如一、……彼の心臓は共感をもって鳴ることがない。」（6・29）彼の自然の世界に、ロッテの側に、アルベルトのような感受性の欠けた人間が住むということは許されぬことであり、ヴェルテルは彼の自然の世界がすでに破壊されていることを予感せずにはおれなかったのです。

暗い予感はずっと現実となって彼の目の前に立ち現われます。まず彼が自然にもっとも近い存在として愛した村の子とその父親の死が告げられます(8・4)。それでもまだ彼はときおり「人生のあかるい展望」(8・21)を夢想しようとするのです。もしアルベルトがいなくなれば、彼の自然の世界はもどってくるかもしれないと幻を追求めます。しかしこれは幻なのです。現実はずっと苛酷に、彼の自然の破壊者がアルベルトのみでないことを示すのです。

「そういうものなのだね。自然が傾いて秋になると、私のところも身のまわりも秋の色に染ってきた。私の葉は黄ばみ、近くの樹々の葉もはや落ちつつある」という象徴的な言葉で書き始められる9月4日の手紙で、奉公先の未亡人に恋をした若い農夫の悲しい末路がのべられます。「そうになったらどうあっても生きてはいない決心をしています」という若い農夫の言葉は、自然破壊者を告発する響をおびています。

自然の破壊は、さらに、彼とロッテがその木蔭によく坐った思い出のある、牧師館の前に生えていた、あの堂々とした胡桃の樹が、心ない自然破壊者によって伐り倒されたエピソードへと受けつがれていきます(9・15)。

巡礼してきた先で、こんなにも次々と彼の自然の世界が破壊されているのを見て、彼の胸の底におそろしい「空虚」(10・19)がひろがっていきます。「かつては充ち溢れる情感の中にただよい、一步を行くごとに天国がひらけ、わがところは愛をもて一つの世界を残る隙なく抱擁したのではないか？ されど、このころはいまははや死んだ。いかなる感動もそこからはながれいでない。わが雙の瞳は乾き、五官も蘇生の涙によって洗われることなく、額は不安もて皺だたんでいる。私はかくも悩んでいる。それというのも、わが生のただ一つの歓喜であったものを失ったからだ。それによって私がわが身をめぐる世界を創造した、あの生を吹きこむ聖い力が消えたからだ！」(11・3)

「今となっては、失われた彼の自然の世界の、唯一の残像ともいうべきロッテの唇にふれて、「この幸福をわがものとして一そののちに罪を贖うべく亡びゆきたい」(11・24)と願うばかりです。

もはやこの世には、ヴェルテルの住むべき世界がないことを、詩人は次のようなエピソードでつたえるのです。それはかつてロッテの父の書記で、「ロッテに恋して、いやまず思いを胸に秘めていたが、ついに打明け、そのために免職になって、それから発狂した」(12・1)という薄倅者の物語です。「なにもかも荒涼としていて、山からは湿った冷たい西風が吹き、灰いろの雨雲が谷に這いこんでいた」冬のさなかに、「女王のために花を摘もうと、希望にみちて家を出る、そして見つからないと嘆き、その見つからぬわけを理解しない」幸せな男を目の前にして、ヴェルテルは「天の神よ、あなたはこれをしも人間の運命とお定めになったのですか。人間は理性をもつようになるその以前か、あるいはそれをふたたび失った以後か、どちらかなくては幸福でないということを！ あわれな男よ！ しかも私は、おまえの悲哀を、やせゆきおとろえゆくおまえの五官の昏迷を、うらやましく思う！」と叫ぶざるをえないので

す。

この後「ヴェルテルの最後の異常の数日について」は、「編者より読者へ」という形で、ヴェルテルの手紙を挿入しながら編者が叙述するという形式にかかります。これまでのヴェルテルの手紙で、彼の死は決定的だという予想はされますが、最後の瞬間を克明に読者に知らせるために、「編者」という第3者を用いたのでしょう。

死へと向って歩むヴェルテルに、あの未亡人に恋をした若い農夫の「愛や誠実や、こうした人間のもっともうるわしい感情が、暴力と殺害に変わってしまった」という事件が知らされます。彼はこの農夫と同じ心情の持ち主です。感動と同情をもって、「この人間を救ってやりたい」と空しい努力をするのですが、「これは消えゆく燈火の最後に燃えあがった炎でした」。その結果は、「おまえを助けることはできぬ、不幸なる者よ！よく分った。われわれを助けることはできぬ」と、ヴェルテルが自然の世界の破滅をはっきりと宣告することになるのです。

しかし死を前にして、人間に敵意をむき出しにしている冬の、すさまじい夜の光景の中で、「戦慄」と「憧憬」にうちふるえながら、「—それならば思いきって—。だのに私はここに坐っている。さながら老婆のように」(12・12)という手紙の、鋭い自己分析は、その名文と相まってまことに感動的であります。

ただ、彼にとって自然の象徴であったロッテが「生きている。その運命を享けている。そして私の運命に共感してくれる」という思い、いやそれをもう一度確認したいという願ひだけが、死を前に、彼を「孤疑逡巡」させています。だからロッテの口から余りにもアルベルト的な言葉、「ほんのしばらくのあいだしずかに考えてくださいまし、ヴェルテル。あなたをご自分を欺き、われとわが身をほろぼそうとしていらっしゃるのです。それがおわかりになりませんか？ どうしてわたしを、ヴェルテル、よりによってこのわたしを？ ひとのものですのに。そんな気さえますのよ、わたしをご自分のものにするのができない、それがかえってあなたの望みをそそってつららせているのではないかしら」という言葉を聞いたヴェルテルは、「はげしい激昂のうちに身をふりきって」帰り、「おお、神よ、あなたが私にあたえてくださった最後の慰めは苦がい涙でした！」と書きしるすのでした。

だがもう一度彼はロッテを訪ねるのです。それは最後の別れのためというよりも、最後の確認のためであったらうと思われまふ。彼はロッテの前で、暗き北欧の詩人オシアンを朗読するのでした。ゲーテは、かつて生に向ってよろこびに溢れていたヴェルテルには明るい南欧の詩人ホーマーを配し、今死を前にしたヴェルテルには、死者をとむらうオシアンの詩を配したのでした。「ふたりははげしい感動にうごかされ、高貴な人々の運命のうちに自分の身のくるしさを味わい、それを共に感じたのです。ふたりの涙は融けあいました……彼は腕をまわして彼女をひしと抱きしめ、顫えながら口ごもっているその唇をものぐるおしい接吻で覆いました」。遂にヴェルテルは最後の確認をえたのです。「あのひとは自分のものだ！ あなたは私のものです！ そうですとも、ロッテ、永遠に」という確認を。「わびしい連中」のひしめくこ

ドイツ文学と『若きヴェルテルの悩み』

の世の中では、彼の自然の世界はほとんど破壊されつくしました。ただ一つロッテの中のみ残されていることを確認したよろこび、このよろこびを永遠のものとするには彼はこの世を去らなければならないということを、彼の鋭い洞察力は見抜いているのです。だからこそ、彼はいま冷静に、よろこび溢れて真冬の夜半に、自らの命を絶ったのでした。「身をめぐるあたりはなべて寂寞として、私の魂はしずかです。神よ、最後の瞬間にこのようなあたたかき思いとこのような力をあたえたもうたことを、感謝いたします」と。

以上『ヴェルテル』のもつ、構成と内容の完璧ともいうべき調和をお伝えしたいと願いましたが、筆者の力では、いかんともしがたいという思いがいたします。作品の熟読玩味を願うばかりです。

シュタイガーも指摘していますように、「彼の2人の師よりも純粹に、切実に新しい精神に没入したゲーテは、かぎりない希望にもえた若者が何の悪気もないのに陥らねばならなかった、真に悲劇的な危機を明らかにする使命を帯びていたのであります」。換言すれば、後進的な当時のドイツ社会で、青年が陥らねばならなかった悲劇をゲーテは描き出したのであります。「ゲーテはこの作品で、公衆の面前に、神聖にしてあたたかき自然を始めてあきらかにしたのです。だからその魅力ないし驚きは限りなかったろう」(シュタイガー)と思われます。この驚きはドイツばかりではありませんでした。フランス流の規則的な型にはまった古典主義が支配的で、ようやくそれに対する不満がつのりながらも、いまだ新しい文学を見出せずにいたヨーロッパ全体に、『ヴェルテル』は衝撃を与え、魅了しつくしたのであります。

*竹山道雄氏の訳語を少し変えた箇所があります。